

寂聴さんとのめぐりあい

武市 鳴雲

一昨年の11月、徳島県人として初めて文化勲章を受章された作家・僧侶の瀬戸内寂聴さんが九十九歳で他界された。連日徳島新聞の紙面は寂聴さんの記事が独占し、三か月余が過ぎても紙面をにぎわせていた。

私は一期一会のご縁を授かり、たった一度だけ寂聴さんにお会いし、お話させてもらう幸運に恵まれた。それは2012（平成24）年11月27日のことで、その日の徳島新聞の夕刊に掲載されている。というのは、徳島県立文学書道館の開館十周年記念展「とくしま讃歌——詩と書と音楽と」が27日に始まり、初日に私は一人で車を走らせ同館に行った。丁度その日に当時の館長であった寂聴さんがお越しになっておられ、たまたま出品者として自分の作品を観

に行つた私が出あわせたというわけである。

私は寂聴さんにご挨拶したあと、一緒に鑑賞をし、私の書作品のご批評・ご感想をいただいた。寂聴さんは気さくに応対してくださり、その時の様子が、その日の徳新夕刊に掲載される結果につながったのである。

記念展には、寂聴さんご自身の現代詩「ふるさと賛歌」を、書道界の先達の西南龍先生が揮毫された作品が展示されていた。私は同郷の吉野川市出身の詩人松崎慧先生の現代詩「高越山」を書かせていただいた作品を出品していた。その作品は全紙より横に広い紙で、かなり大きいものであった。寂聴さんは例の明るく若々しい声で「高越山は私もよく知っているわよ。いい詩だわねえ」と話してくださった。

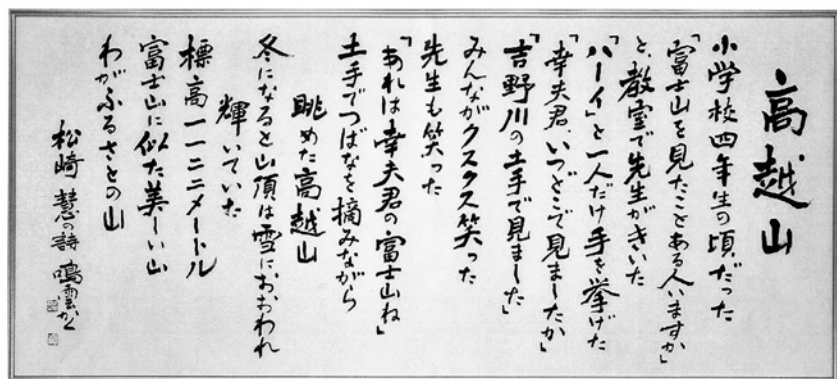
その後、松崎先生に声をかけると、喜んでその作品を引き取ってくださった。今からこれ十年前の話である。

そして一昨年12月9日、わが師小坂奇石先生のご令嬢で、永年にわたる先生のご功績を後世に伝えるため情熱を注がれた名誉館長小坂淳子さんが、同じく名誉館長であられた寂聴さんの後を追うように急逝された。相次いで二人の名誉館長が他界され、徳島県立文学書道館に出入りするわれわれも淋しい限りである。

お二人のご冥福をお祈りするとともに、同館が今後ますます発展するよう微力を尽したいと考えている。



武市鳴雲 書



松崎慧 詩 武市鳴雲 書